

## 天下の要衝—大山崎と離宮八幡宮

離宮八幡宮の由来は、当社 HP に詳しいが、以下の様である。

「平安時代（794～）の始め、清和天皇が太陽が我が身に宿る夢を見、神のお告げをお聞きになりました。そのお告げとは国家鎮護のため、九州は宇佐八幡宮より八幡神を京へ御遷座せよというものでした。そこで清和天皇は僧の行教にそれを命じます。天皇の命を受け、八幡神を奉じて帰京した行教が山崎の津（当時淀川の航海のために設けられていた港）で夜の山（神降山）に靈光をみましました。

不思議に思いその地を少し掘ってみると岩間に清水が湧き出したのでここにご神体を鎮座し、社を創建することにしました。

貞観元年（859）国家安康、国民平安を目的とする「石清水八幡宮」が建立されました。ここは嵯峨天皇の離宮である「河陽宮」の跡地であったため、後に社号が「離宮八幡宮」と改称されました。」

「油祖」と言われる所以も、以下の通りである。

「貞観年間、時の神官が神示を受けて「長木」という搾油器を発明し荏胡麻油の製油を始めました。当初は神社仏閣の灯明用油として奉納されていましたが次第に全国にこの業が広まり、離宮八幡宮は朝廷より「油祖」の名を賜りました。また、油座として離宮八幡宮は油の専売特許を持ち栄えてゆきます。諸国の油商人は離宮八幡宮の許状無しには油を扱うことはできませんでした。」

以上の様に、平安京の鎮護として建立され、地の利を生かした荏胡麻油の生産販売を一手に担った離宮八幡宮と大山崎は、菜種油が登場するまでの間、大いなる繁栄を享受するのである。

右段の絵図は、江戸時代中期の離宮八幡宮を描いたものであるが、美しい神社であった。大山崎神人の活躍には、八幡宮信仰も大きな力になった



離宮八幡宮絵図（江戸中期）  
離宮八幡宮 蔵

に違いない。その活躍や歴史はこれからも新しい資料の発見や考察で深められることと期待されるところである。

この美しい離宮八幡宮のある山崎は、天王山（270 m）と男山（142 m）に挟まれ、桂川、宇治川、木津川の三川が合流し淀川となって大阪湾へとそぐ起点となるところで、天王山の裾を巻くように西国街道（京都から西宮）が走り、まさに中世の京都を護る要衝である。

この地の歴史をみれば、南北朝時代（1336～92年）、応仁の乱（1467～77年）、そして「天王山」と言えば天下を左右する戦いの代名詞ともなった羽柴秀吉と明智光秀の戦い（1582年）など、その後の日本の歴史を変えた節目の戦いが繰り広げられたところである。大山崎は、それら戦乱の中をよく潜り抜け生き延びていく。

しかし応仁の乱で、大消費地京都の疲弊はなほだしく、続く戦国時代の楽市楽座（自由経済の中での「座」の特権の消失）の流れ、末期には、天王山の戦いに勝った秀吉がしばらく大山崎に城を構えていたが大坂城に移ってからは、大坂が政治

経済の中心となり、山崎からも油絞の職人や商人が移住していく。こうして軒を連ねた油屋や長木で油を搾る音で西国街道を賑わした大山崎の姿はかつての栄光を失っていくのである。

そして離宮八幡宮は、1601年に徳川家康から大山崎の地を神領として安堵され、1634年、三代将軍徳川家光による離宮八幡宮の官費造営が行われ、絵図に残る美しい姿を残すことになる。

「山崎長者」と言われた最盛期の時期は、南北朝から応仁の乱の前頃までと言われ、荏胡麻の集荷・製造・販売を一手に支配しその影響力は、西は九州そして畿内一円（ただし大和は別だったようである）、東は美濃に及んだ。

荏胡麻の集荷は瀬戸内の諸国から「山崎胡麻船」と呼ばれる海運で淀川をさかのぼり運んだ。その様子を、文安2年（1445）に兵庫北関入船納帳に見ることができる（東大寺管轄の兵庫北関の関料

徴収簿―「離宮八幡宮と中世の灯明油」大山崎町歴史資料館 第22回企画展 展示図録より転載）。ここで「山崎胡麻」「山崎物」と記載されている積載品が荏胡麻と推定される。

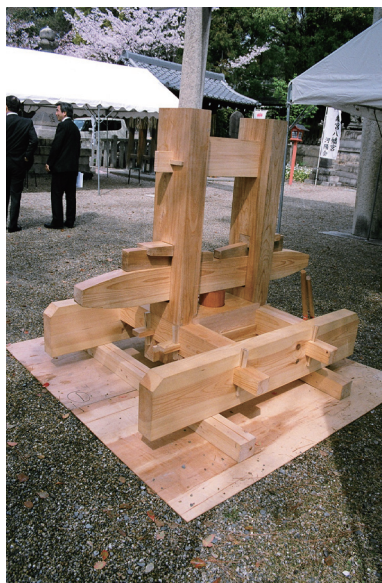
これを見ると荏胡麻の集荷はかなり大がかりであったようで、おそらく販売も遠方へは商隊を仕立てて行ったのではないだろうか。天秤棒を担いでの振り売り姿は、近場の京都だけだったのかもしれない。

経済の発達や、新しい都市の建設は、灯明に使う油の需要を喚起し、やがて荏胡麻から栽培しやすく生産性の良い菜種・綿実という新しい油糧作物へ、搾油の技術革新（長木から締木へ：締木は遠里小野村での発明とされているが、12世紀後半に描かれた『信貴山縁起絵巻』（国宝）「山崎長者の巻」に、締木に似た油絞り機が描かれている）も手伝って移り変わっていくのである。



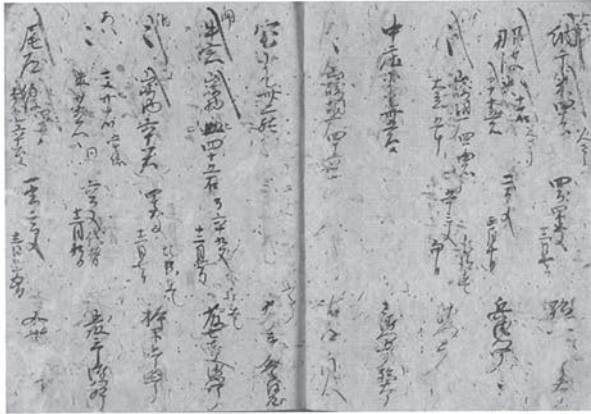
↑大山崎・離宮八幡宮社殿  
←日使頭祭で行われた湯立の神事

(2016年4月9日 日使頭祭にて撮影)



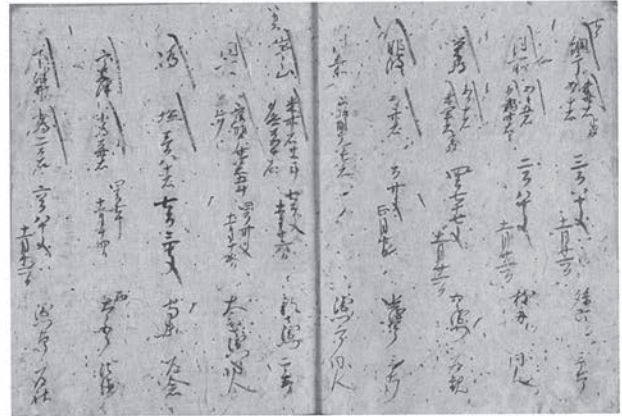
↑復元された「長木」  
←復元された押木いずれもサイズは縮小して復元されている。

(2016年4月9日 日使頭祭にて撮影)



兵庫北関入船納帳 文安2年(1445)

「山崎胡麻」以外にも「山崎物」という記載がある。当時の物資の流通する記す屈指の史料である。



兵庫北関入船納帳 文安2年(1445)

文安2年段階の東大寺管轄の兵庫北関の関料徴収簿である。ここでは大山崎が扱う「山崎胡麻」が積載品として記されている。



兵庫北関入船納帳  
文安2年(1445)

兵庫(神戸市兵庫区)は、瀬戸内海屈指の良港であり、後の神戸港の前身にあたる。当史料は1960年代中葉に林屋辰三郎氏が古書店で確認され、現在は重要文化財に指定されている。なお、近年補修が完了した。

船籍地	積載品目	数量	関料	納入月日	船頭	船主(関丸)
塩飽	山崎胡麻	83石	275文29		二郎五郎	道祐 元ハ屋後屋
観音寺	山崎コマ	60石	667文	4月9日	与五郎	豊後屋
塩飽	山崎コマ	96石5斗	175文	4月4日	泊 太郎左衛門	道祐
地下	コマ	1石半双	230文		小太郎納	同日入
蒲刈	コマ	20石他	豊前斗 代替7貫文	5月27日	嶋末	道祐
蒲刈	コマ	20石他	豊前斗 代替2貫700文	5月27日	九郎左衛門	道祐
塩飽	コマ	20石他	讃岐斗 管領1000石内 1貫200文	6月24日	大蔵	道祐
地下	コマ	1石他	85	6月18日	太郎五郎	
地下	胡麻	10石	讃岐斗 260文	6月26日	堺三郎	
尾道	コマ	3石他	220文	7月10日	九郎左衛門	二郎三郎
尾道	コマ	10石他	2貫500文	7月28日	藤五	南孫太郎
伊部	コマ	5石他	450文	10月4日	治部太郎	二郎三郎
網干	コマ	3石他	420文	10月27日	枝舟衛門五郎	三郎太郎
中庄	山崎胡麻	30石			祐道	孫太郎
泊 牛窓	山崎胡麻	120石	55文	11月17日	掃部	衛門九郎
地下	コマ	40石他	1貫100文	11月27日	枝舟二郎衛門	
番田	山崎胡麻	50石他	353文	11月7日	大蔵	衛門九郎
那波	山崎胡麻	44石			衛門二郎	三郎太郎
平山	山崎胡麻	24石5斗他	430文	11月15日	太郎左衛門	二郎三郎
塩飽	コマ	5石他	620文	12月10日	太郎衛門	道祐
地下	胡麻	20石	545文	11月16日	堺三郎	
泊 牛窓	山崎コマ	48石		11月13日	枝舟掃部	衛門九郎
霧著	山崎胡麻	20石	起請文在之		関内	左衛門四郎
宇多津	胡麻	46石5斗	山崎物		四郎二郎枝舟 三郎太郎	法徳
尼崎	コマ	40石	山崎物 在之起請文		太郎	
那波	山崎胡麻	44石他	53文 起請文在之		衛門二郎	孫太郎
中庄	山崎胡麻	46石			祐道	孫太郎
関 牛窓	山崎物	45石	169文 起請文在之	12月7日	藤七大夫	衛門四郎
泊 牛窓	山崎物	61石	45文 起請文在之	12月7日	掃部二郎	二郎
番田	山崎物	50石	320文	12月15日	大蔵	衛門九郎
地下	コマ	20石[5斗儀]他	1貫文	1月27日	豊後屋衛門三郎	
地下	コマ	15石[5斗儀]他	650文	1月27日	豊後屋衛門三郎	
泊 牛窓	山崎物	150石	45文 起請文在之	12月7日	掃部	衛門九郎
香西	コマ	3石他	380文	12月19日	兵衛三郎	道親
別宮	山崎コマ	41石5斗	45文	1月10日	若大夫	三郎太郎
尾道	コマ	5石他	645文	12月15日	祐宗	孫太郎
連嶋	コマ	5石他	370文	12月10日	祐寛	道祐
連嶋	コマ	12石			二郎三郎	道祐
宇多津	山崎コマ	34石			六郎太郎	
地下	コマ	10石他		1月22日		
地下	コマ	7石他			二艘分	
平山	山崎コマ	51石5斗他	383文	12月14日	与平四郎	二郎三郎
那波	山崎物	44石5斗他	52文	1月〇日	衛門二郎	三郎太郎
松江	山崎物	32石5斗他	150文	1月〇日	形部二郎	木や
番田	山崎物	75石	103文	12月2日	大蔵	
泊 牛窓	山崎コマ	163石5斗	米1俵		湯屋辻子二郎三郎	
船上	山崎コマ	13石	45文 起請文在之		吉内	衛門四郎
霧著	コマ	26石山崎物	45文	2月23日	六郎四郎	衛門四郎
霧著	コマ	10石山崎物			二郎三郎	衛門四郎
塩飽	山崎物	20石5斗	55文	12月27日	五郎二郎	三郎二郎
中庄	山崎コマ	37石	45文		二郎中務	
番田	山崎コマ	50石他			大蔵	衛門九郎
塩飽	シホ 山崎物		1貫46文	1月10日	太郎兵衛	道祐
那波	シラ 山崎物		那波塩3斗		衛門二郎	太郎

兵庫北関入船納帳にみる  
「胡麻」「山崎胡麻」「山崎物」

少なくとも「山崎胡麻」「山崎物」については、荏胡麻など、大山崎関連の物資を運搬していたものと思われる。瀬戸内海沿岸の船籍地が記されており、西日本各地の港津で荏胡麻が取り扱われていたことがわかる。また『離宮八幡宮文書』の各史料では、兵庫津における関料免除が謳われているが、この入船納帳では関料徴収の対象になっている。

「離宮八幡宮と中世の灯明油」大山崎町歴史資料館 第22回企画展 展示図録より

「兵庫北関入船納帳」(国指定重要文化財)京都市歴史資料館 蔵